

元代の才子佳人劇に見られる男女の倫理観について

——元雜劇「瀟湘雨」・「鴛鴦被」の描写を例に——

林 雅清

要 旨

元雜劇の題材には、書生と良家の娘（あるいは妓女）が恋仲になり、紆余曲折を経て最終的に結ばれる「才子佳人劇」がある。両者が結ばれることで大団円となるテーマだが、一方あるいは双方が望んでいなかった婚姻を「大団円」として描く作品もある。本稿では、その特徴的な作品である「瀟湘雨」劇と「鴛鴦被」劇を取り上げ、それぞれの人物描写を分析することによって、元代の中国における男女の倫理観、および書生の婚姻の理想形態について検証する。

キーワード 元雜劇、才子佳人劇、「瀟湘雨」、「鴛鴦被」、倫理観

1. はじめに

男女の恋愛は、古今東西のドラマに共通する一大テーマである。中国古典演劇の分野においては、中でも書生と良家の娘、あるいは書生と妓女との恋愛から結婚をテーマにした作品を、「才子佳人劇」と呼ぶ¹⁾。

中国古典演劇の最も早い完成形態である元雜劇においても、分類の基準によって数に若干の変動はあるものの、才子佳人劇は現存するテキスト約150種の内30種余りと、全体の約2割を占める。

小説の分野における「才子佳人小説」は、早くは唐代の伝奇小説より描かれ、宋代の話本小説を経て明清小説に至ってその数を飛躍的に延ばすが、演劇の分野においてはこの元代の雜劇を端緒とする。中でも最も世に知られる作品は、王実甫の『西廂記』（『崔鶯鶯待月西廂記』）であろう。書生の張君瑞（張珙）と、崔相国の娘である鶯鶯が相思相愛となり、鶯鶯の侍女紅娘の助けによって密会を重ね、二人の婚姻に反対する相国亡命人を説き伏せて、張君瑞が科挙に状元として及第した後、に団円するという、その

典型的な「才子佳人」の物語は、後の作品にも多大な影響を与えたと考えられる。無論、これは唐の元稹の伝奇小説『鶯鶯伝』（『会真記』）に取材した金の董解元『西廂記諸宮調』（『董解元西廂記』）を改編した演劇作品であり、オリジナルストーリーではないが、書生（才子）が科挙の受験に赴く途中で自分より身分の高い家の娘（佳人）と恋に落ち、最終的に科挙に及第してその娘と結婚するという話は、当時の書生にとっては理想的な成功譚であったに違いない²⁾。

元雜劇において類似する「才子佳人劇」は複数存在するが、中には相思相愛でなかった男女が、あるいは元の相思相愛の状態が続かないまま、極端な例では一方（女性）が他方（男性）に恨みや憎しみを抱きながら、最終的に結婚に至り「大団円」となる作品が見られる。このような、一見書生の理想的な成功譚とは言い難い才子佳人劇が生まれた背景には何があるのか。また、この種の演劇を受け入れた当時の人々の男女観、あるいは婚姻に関する倫理観とは如何なるものだったのか。本稿では、その特徴的な作品である「瀟湘雨」劇と「鴛鴦被」劇を取り上げ、上記の問題について検証してみたい。

2. 元雑劇「瀟湘雨」の内容

「瀟湘雨」劇と「鴛鴦被」劇の描写を分析するに当たり、両劇の概略を把握しておく必要がある。

まず、「瀟湘雨」劇について概観しておく。

「瀟湘雨」劇（「臨江駅瀟湘秋夜雨」）は、元代初期の元曲作家、楊顯之の作とされている。元の鍾嗣成『録鬼簿』によると、楊顯之は大都の人で、閔漢卿と「莫逆之交」であったという。現存する作品は本劇と「酷寒亭」劇（「鄭孔目風雪酷寒亭」）の2種であるが、いずれも優れた作品として知られる。

現存する「瀟湘雨」劇のテキストには、『古雜劇』本（顧曲齋本）、『元曲選』本、『柳枝集』本（『古今名劇合選』所収）の3種の明刊本がある。『古雜劇』本と『元曲選』本の間には曲牌・曲辭に多少の異同が見られるが、プロットに大差はない。『古今名劇合選』は『元曲選』より後に編纂されたものであり、主に『元曲選』本を参考にしている。なお、『元曲選』本では撰者の臧晋叔によって手が加えられているが、最も広く通行した元雑劇のテキストが『元曲選』であり、また次の「鴛鴦被」劇と共通する版本が『元曲選』本のみであることから、本稿では『元曲選』本を底本として用いる³⁾。

「瀟湘雨」劇の梗概は、以下の通りである。

楔 子：時代は北宋末、讒言により江州への左遷が決まった諫議大夫の張天覺（張商英）が、娘の翠鸞を連れて任地に赴く途中、神を祭らずに淮河を渡ろうとしたところ強風で船が転覆し、父娘は生き別れてしまう。翠鸞は船頭に助けられるが、その船頭も張天覺を探しに行ったまま戻らず、一人きりになったところ、漁師の崔文遠に救われ養女になる。

第一折：一命を取り留めた張天覺は、娘を引き取り世話してくれた者に銀子10両の謝金を出すとの触れ文を残し、江州へ赴く。河南の書生、崔甸士（崔通）が、科挙を受験するため上京中、伯父の崔文遠の家を訪れたところ、翠鸞と出会い、翠鸞に一目惚れする。崔文遠は翠鸞を崔甸士に嫁がせようと

する。翠鸞は実父の行方がわからないため悩むが、まんざらでもないことから縁談を受け、崔甸士と夫婦の契りを交わす。崔甸士はすぐに科挙受験に赴き、翠鸞は夫に裏切られないか心配する。

第二折：崔甸士は、科挙の2次試験の主管である趙銭に気に入られ、独身なら娘を嫁にと勧められたところ、迷わず独身と答える。すると趙銭から秦川知県の官職を与えられ、趙銭の娘を連れて任地に赴く。翠鸞は、崔甸士が秦川の知県になったと知り、3年経っても迎えに来ないことから秦川に崔甸士を尋ねる。崔甸士は新たに娶った趙銭の娘の手前、訪ねて来た翠鸞のことをかつて家財を盗んで逃亡した下女であると罵り、打ち据えて流刑に処す。

第三折：張天覺は皇帝の勅許を得て廉訪使の職と切り捨て御免の宝剑を賜り、不正役人を取り締まるため各地を回る。一方、翠鸞は風雨の中、護送役人に責め立てられつつ流刑地の沙門島へと向かう。

第四折：崔文遠は、翠鸞から音沙汰がないため自ら秦川県に向かう途中、臨江駅の役所の軒下に一泊する。張天覺は、廉訪使として臨江駅の役所に宿泊する。護送役人は翠鸞を連れて臨江駅の役所に宿を取ろうとするが入れてもらえず、翠鸞は一晩中わが身の上を嘆き悲しむ。夜が明けて翠鸞と再会した張天覺は、事の顛末を知り、崔甸士を捕らえに行かせる。怒りが収まらない翠鸞は、自ら張天覺の手下を連れて崔甸士と趙銭の娘を捕らえに行き、張天覺の前に引っ立てる。張天覺は、崔甸士と趙銭の娘を市中引き回しの上処刑しようとするが、現れた崔文遠の執り成しによって翠鸞が怒りを収めたため、翠鸞を再び崔甸士の妻とし、崔文遠を恩人として張家に迎え、趙銭の娘を翠鸞の下女とすることで許し、大団円となる。

3. 元雑劇「鴛鴦被」の内容

次に、「鴛鴦被」劇について概観する。

「鴛鴦被」劇（「玉清庵錯送鴛鴦被」）は作者不詳である。現存するテキストには、『古名家

雑劇』本、『古今雑劇選』本（息機子本）、『元曲選』本の3種の明刊本があるが、プロット・曲辞ともに大きな異同はない。「瀟湘雨」劇と同じく、本稿では『元曲選』本を底本とする。

「鴛鴦被」劇の梗概は、以下の通りである。

楔 子：清廉な役人であった洛陽の李府尹（李彦実）は、讒言により長安へ召喚されることになる。路銀の工面を玉清庵の劉道姑に相談したところ、金貸しの劉員外（劉彦明）を紹介される。劉員外は李府尹に年頃の娘が一人いることを知ると、娘の玉英にも証文に書き判をさせ、劉道姑を証人として、李府尹に銀子10両を貸す。李府尹は死を覚悟して長安に向かう。

第一折：1年後、李府尹が戻らないため、劉員外は劉道姑に対し、李府尹に貸した銀子の元本利息合わせて20両を取り立てに行くよう、その実、玉英が妻になれば借金を帳消しにすると仲を取り持つよう迫る。針仕事をしてやっと生計を立てている玉英に返せる銀子もなく、裁判沙汰を恐れた劉道姑の口車に乗せられ、玉英は玉清庵で劉員外と密会する約束をし、証拠として自らが縫った鴛鴦の掛布団を劉道姑に預ける。

第二折：その夜、外出した劉道姑から密会の件を言い含められた弟子の若い道姑は、先に訪ねて来た姑蘇の書生、張瑞卿を劉員外と勘違いし、庵に引き入れる。張瑞卿は庵での男女の密会を察知し、劉員外の振りをして後から来た玉英と契りを交わす。その後正体を明かした張瑞卿は、玉英から仔細を聞くと、科挙に合格して官職を得たら必ず迎えに来ると約束し、鴛鴦の掛布団を証にもらって上京する。一方、劉員外は盗賊と間違えられて捕らえられ、一晚中役所で吊るし上げられていた。玉英が別の男と密会したことを知ると、劉道姑を遣わせて玉英を強引に娶ろうとする。

第三折：劉員外は、脅してもすかしても自分に靡かない玉英を自らが経営する酒場で働かせ、客の相手をさせる。状元として科挙に及第し、官職を得て洛陽に赴任した張瑞卿

は、身分を隠して玉英を探していたところ、酒場で接客する玉英に出会う。玉英から仔細を聞くと、劉員外を呼び出させ、20年前に家を出た玉英の兄と偽って銀子20両を返すと約束し、結婚したいなら3日後に結納の品を準備して迎えに来るようにと告げ、玉英を連れて帰る。

第四折：張瑞卿は兄として、玉英に寢床を整えておくよう命じ、鴛鴦の掛布団を置いたまま外出する。気付いた玉英が帰宅した張瑞卿を問い質すと、張瑞卿は正体を明かし、二人は愛を確認し合う。劉員外が訪れ、自分の女房に何をすると騒ぎ立てる。そこへ、3年前の弾劾が偽りと発覚して復権し河南府尹となった李彦実が通りかかり、仔細を知ると、劉員外を40回の棒打ちに処して役所へ引っ立て、張瑞卿を屋敷に迎えて玉英との婚礼を執り行い、大団円となる。

4. 両劇における「才子」と「佳人」の描写

「瀟湘雨」劇に見られる、書生（才子）が科挙の受験に赴く途中でうら若き娘（佳人）に出会って恋をし、最終的に試験に合格してその娘と結ばれる、という大筋は、『西廂記』に似た典型的な「才子佳人劇」である（崔と張という姓の交差一致も『西廂記』のパロディと考えられる）が、『西廂記』と大きく異なるのは、両者が相思相愛のまま結ばれるのではなく、「才子」が一旦「佳人」を裏切って別の女性と結ばれ、「佳人」は「才子」によって貶められ虐げられたにもかかわらず、最終的に元の鞘に納まるという点である。

本劇における「佳人」の貶められ方は尋常ではない。まずはその描写を追ってみたい。

「才子」である崔甸士は、「佳人」の張翠鸞と出会った時には「すばらしい娘だ」⁴⁾と感嘆して即座に婚姻を結び、別れ際には「私がもしあなたを裏切ったなら、天は私を蓋わず、地は私を載せず、日月は私を照らさないことごぞいましょう」⁵⁾などと嘯きながら、科挙の試験官（実は愚かな道化役人として描かれている）から娘婿に迎えたいと言われると、内心「伯父上のあの娘は実の子ではないし、どこから貰っ

て来たのかもわからぬ。あれを妻として何になるというのだ。たとえ天地神明に背くとも、この好機を逃すわけにはゆくまい⁶⁾と考へ、妻はいないと嘘をつく。3年後に翠鸞が訪ねて来ると、「こいつは家で買った下女だ。わが家の銀の酒壺とその台を盗んで逃げ出してしまい、一向に見つからなかったのだ。今日は自分からやって来るとは、まさに飛んで火に入る夏の虫。子ども、引っ捕らえて身包みはがし、打ち据えよ⁷⁾」と言って引きずり出させ、顔に「逃奴」という入れ墨を入れて沙門島へ島流しにする。そして、護送役人には途中で始末するよう命じる。枷を付けられ鎖に繋がれた翠鸞は、護送役人に棍棒で打たれながら、大雨でぬかるむ道を行く羽目になる。

結局、翠鸞は復権した父親に再会して救われ、崔甸士らを捕らえて処刑しようとするが、崔文遠の再三の執り成しによって崔甸士を許してしまう。その許し方も、「崔通を殺したところで、ほかの男を婿に迎えることはできませんし。ただ、あの女の顔に『潑婦』(あばずれ)と入れ墨をし、下女としてわたくしに仕えさせてもらえれば結構です⁸⁾」という妥協案を示すのだが、父親の張天覚はそれを聞くと、「それもそうじゃな。子ども、やつらを連れてまいれ。崔文遠どのの顔に免じて死罪を許す。恩人どのはわが家に招き、終生養って進ぜよう。娘は再び崔通の妻とする。その女も父である趙礼部どのの顔に免じて入れ墨を許し、下女として娘に仕えさせん⁹⁾と、娘の希望を半分容れずに復縁させる。そして、崔甸士は元の秦川知県に返り咲く。

かくも不義理で残忍な仕打ちをする崔甸士のような男は、例えば「水滸劇」などの義侠ものでは必ず好漢の刀下の鬼となるのだが、本劇では被害者本人によって許され、しかも被害者の「佳人」と加害者の「才子」が復縁するという結末を迎え、それを「大団円」としている。

主人公である「佳人」の翠蓮は、最後の2曲で、復縁がしぶしぶである旨と、それでも恨みを忘れて「才子」たる夫の崔甸士に尽くそうとする決心を歌っている。

【酔太平】 いかんせん、良心のない解元が、

薄幸の佳人を打ったため、あやうくも、楽昌公主の割れた鏡が二度と円やかにはならず、むざむざ罪を着せられただけとなると。父上は、高々とした森羅殿を掌握し、崔通は、いそいそとして秦川県に帰りゆき、翠鸞は、嫌々ながら武陵源へと踏み入るの。これもみな、かの蒼天の思し召し。

【尾煞】 これからは、琴瑟鳴らして祝宴開き、雨と風とに晒された、千苦万労、もう口にせず。二人さながら、鸞膠で、断られた弦を繋ぎ合わせ、別れた鳥が交頸の、鴛鴦ならんと舞い戻り、籬を隔つ花伸びて、並蒂の蓮というところ。君がもし、卓文君の「白頭吟」に背かないなら、わたくしも、台を捧げて百まで共に暮らしましょう。嬉しいことだけ記憶して、恨みを忘れるわけじゃないけれど、女心は実に移ろいやすいもの。¹⁰⁾

一方、「鴛鴦被」劇にも、『西廂記』の影が見られる。第三折の前半、借金を返せず劉員外に酒場で働かされる李玉英が、自身を崔鶯鶯に、張瑞卿を張君瑞に、梅香(侍女)を紅娘に譬え、【紫花児序】の曲に乗せて、「君瑞さまは、今は遠くにいらっしやり、紅娘もすでに逃げ去って、ただ一人、鶯鶯だけが取り残される。家に財産ないために、わたしは黙って耐え忍ぶだけ¹¹⁾と歌う。つまり、主人公の玉英にとっては、この物語も『西廂記』と同様の「才子佳人劇」ということになる。

確かに、「鴛鴦被」劇の「才子」張瑞卿は、先の「瀟湘雨」劇とは異なり、科挙に合格すると約束を違えず「佳人」の玉英を迎えに戻ってくるが、出会いの場面は理想的な「才子」とは言い難い。宿を借りた道教寺院で他人に成りすまして見ず知らずの女性と契りを交わすのである。結果、その女性、すなわち「佳人」玉英は、騙した相手である張瑞卿を「才子」として認めて相思相愛となり、その張瑞卿に操を立てて、借金の形とはいえ一度は嫁ぐ気持ちになった劉員外を受け入れなかった。

劉員外こそ災難である。当初から下心はあったものの、李府尹から頼まれて金を貸し、一年

待ったが返しに来なかったため、連判した娘に督促する。返せなかったら身体で返せと脅迫するのではなく、納得済みで自分の正式な妻になるよう道姑に説得させる。結果、相手が名門の出で巨万の富を持っていると言っても靡かなかった玉英も、23歳の「とびきりの男前で、お嬢さまにお似合いですわ」¹²⁾と勧められると、「それなら道姑さんの言うとおりにするしかないわね」¹³⁾と縁談を承諾し、玉清庵で密会する運びとなる。その夜、進んで密会に赴いた玉英は、「今夜、劉員外さんと玉清庵で会うって約束しているの。わたくしまだ生娘ですから恥ずかしくて、どういう顔をして行けばいいのかしら」¹⁴⁾と恥じらいさえする。「瀟湘雨」劇の翠鸞と同じく高位高官の娘という設定ではあるが、深窓の令嬢たる「佳人」の雰囲気はあまり出ておらず、性に対してもいくらか奔放な態度が見て取れる。以下、相手の「才子」が劉員外であると思ひ込んだまま暗闇の中で密会する場面における、連続する玉英の歌を3曲挙げておく。

【伴読書】 かんざしが、落ちてそのまま挿そうともせず、まゆずみが、薄くなっても描かせないまま。びくびくとした不安な気持ちが捨てられず、汗がびっしょりハンカチ濡らす。わたくしほんとにうれしくて、入り口の鍵をかけ忘れてきたようですわ。がさごそと、誰かが入ってきたみたい。

【笑和尚】 なんだ軒先で、りんりと鳴る風鐸なのね。風に吹かれてかさかさ鳴る、草堂にかかる絵だったの。寝ていた鳥が、いばらの枝からばたばた飛び立ったのですね。そしてぎしぎし竹が鳴り、窓からきらきら月が射し込み、もうびっくり、ぶるぶる震えて動悸がおさまりませんのよ。

【尙秀才】 この人は、大法螺で、わたくしのことを押さえつけ、わたくしの、小さな胸は、すんでのところでつぶれるところ。ああ、まわりつく殿方よ、もし人にでも見られたら、もしも誰かにつかまったなら、たちまち事が漏れますわ。¹⁵⁾

これほど激しい性行為の隠喩が続く曲を「佳

人」に歌わせるところにも、元曲における文学性の飛躍・解放の一端があると考えて差し支えないのではなかろうか。

さて、劉員外は運悪く盗賊と間違えられて捕えられ、玉英と密会できなかったばかりか、旅の「才子」に寝取られる。しかも、玉英はその男に惚れ、自分の妻になろうとしない。結局、貸した金が戻ってこないばかりか、玉英を脅迫して妻にしようとした廉で裁かれ、罰せられる劉員外こそ、庶民的な悲劇の主人公と言えよう。しかし、本劇における劉員外は道化的な悪役であり、劉員外に対する同情の描写は見られない。唯一あるとすれば、「ちくしょう。てめえら二人、役人同士でなれ合いやがって。おれはもうおしまいだ」¹⁶⁾という劉員外の最後のせりふぐらいであろう。

実は、「瀟湘雨」劇においても、女性の道化役かつ敵役である趙銭の娘（脚色「搥旦」）が、見方によっては悲劇のヒロインでもある。父親の勧めで結婚した相手にはすでに妻がおり、ある日突然その妻が現れて夫を返せと迫る。しかもその妻は主人公の「佳人」である。最終的に、その妻の父親の方が権力があつたため、自分は崔甸士の妻の座を失い、復縁した元の妻の下女としてそのまま崔家に仕えることとなる。まさに降って湧いた悲劇である。しかし、道化的性質を有する「搥旦」である彼女が、「悲劇のヒロイン」になることはあり得ない。その態度や言葉の端々に道化的要素が散りばめられており、最後に張天覚によって「下女として娘に仕えさせん」という判決が下されると、「どっちもおんなじ父親で、どっちもおんなじ役人なのに、向こうはこんなに権勢があつて、あたいのおとうは全然あたいを救ってくれない。言っとくわよ、下女になつてもいいけれど、妾にもしてね。亭主を独り占めなんて許さないんだから」¹⁷⁾と泣きながら捨てぜりふを吐く。泣いているところが（本当に泣いていればだが）、彼女に唯一の「悲劇性」を感じる点である。

5. 元雑劇の「才子佳人劇」における男女の倫理観

筆者はかつて、「元曲は極めて「勸善懲悪」

的な芝居」であると論じた¹⁸⁾が、本稿で取り上げた「瀟湘雨」と「鴛鴦被」の両劇においては、現代の一般的な価値観からすると、必ずしも「勸善懲惡」が成し遂げられているとは言えない。「瀟湘雨」劇では、ヒロインに多大な肉体的・精神的苦痛を与えた崔甸士が、罰せられないばかりか高官の娘であるヒロインと復縁し、官位もそのまま、さらに2番目の妻とも別れるでもなく妾として同居することとなる。一方、「鴛鴦被」劇では、正当に婚姻を申し込もうとした劉員外が処罰される。劉員外は計画的かつ間接的に多少脅迫はしたにせよ、「瀟湘雨」劇の崔甸士に比べてもそれほどの悪行とは言えない。果たして、両者の差は一体どこにあるのか。

いずれも、「佳人」である女性主人公の仕打ちに対する結末であることに違いはない。異なるのは、その行為者が書生、すなわち「才子」か、そうでないかである。要するに、前者の仕打ちの方が酷いが前者は「才子」であるため罰せられず、後者の行為はそれほど酷くなくても、「才子」の敵ないしライバルであるがゆえに罰せられることとなる。そう考えると、いずれも納得できる結末である。

「才子佳人劇」では、当然のことながら「才子」と「佳人」が団円することを目的としたストーリーを構成するため、個別の作品によって構成や倫理観に差異がみられる場合がある。共通点としては、父親が結婚相手を決めるという点があり、儒教的封建思想が影響していると考えられることも妥当である。「瀟湘雨」劇については、筆者らも「儒教的な考えでは、女性は一人の男性に生涯仕えることが美德とされた。張天覚は科挙を経て大臣になった一級の儒教的教養を備えた人物である。それゆえ娘の翠鸞もその美德に従ったのであろう。良家の娘の設定がここでも活かしている。加えて、元雑劇は、離散した一家が再び団円するという終幕を好む傾向を持つが、それも再婚の一因に挙げられよう。終幕の展開は急転直下かつ強引だが、元雑劇では、しばしば終幕まで劇の展開に緊張を保つ工夫がなされる。本劇も最後まで緊張が続く展開を狙い、このような幕引きとなった¹⁹⁾と考えていた。しかし、ただ儒教の影響だけではないとい

うことが、「鴛鴦被」劇との比較によって明らかになった。それは、「書生の願望」という側面である。

「才子佳人劇」が現存する元雑劇作品のおよそ2割を占めるということは、それ相応に観衆や読者にも受容されたテーマであり、娯楽性もあつたはずである。しかし、「公案劇」（裁判もの）や「歴史劇」ほどの娯楽性があるとは考え難い。ならば、なぜこれほどの割合で「才子佳人劇」が存在するのか。それは、「才子佳人劇」の作者が「才子」、つまり書生であったためではなかろうか。

元雑劇の作者について、かつて吉川幸次郎氏は、元代では科挙制度の縮小・廃止に伴い士人（知識人）が教養を生かす道として「教坊の技芸の為に、台本を提供すること」を選んだと分析し、また元代後期には科挙が復興されたことにより「科挙に及第しがたい二流三流の人士」、つまり落第書生が元雑劇を作成したと論じている。また、小松謙氏は、元雑劇の作者は「下層知識人」と「演劇関係者」が中心であったと分析し、特に元代後期には「上流階級の人々とその取り巻きを対象として」上演されたため「読書人向け」の作品が多数作られたと論じている²⁰⁾。「瀟湘雨」劇の作者楊顯之は、元代前期の北方の人士である以外の身分は不詳であるが、文辞に長けていることから知識人であった可能性は高い。「鴛鴦被」劇の作者は不詳であるが、莊一弘『古典戯曲存目彙考』（全3冊、上海古籍出版社、1982年）によれば元から明にかけて作られた作品ということであり、作者は元代後期の元雑劇作家である可能性が考えられる。いずれにせよ、科挙を受けようと教養を積んできた人物、すなわち「書生」が、両劇を含む元雑劇作品の作成に係わっていた可能性は大いにある。

仮に、浮気を許し自分だけに操を立てる「佳人」を娶ることが科挙に及第することと同等の「書生の願望」、つまり作者（あるいは観衆）の願望であったとするならば、本稿で取り上げた両劇の描写も納得できるものとなる。つまり、「才子佳人劇」の才子像には「瀟湘雨」劇の崔甸士のように理想的とはいえない「才子」もある一方で、佳人像には、『西廂記』の崔鶯鶯に

代表される積極的で美しい良家の娘というだけでなく、「瀟湘雨」劇の張翠鸞のようにいかなる仕打ちをされても才子を許す要素、そして「鴛鴦被」劇の李玉英のように騙して操を奪った才子であっても一途に思い続ける要素などが付加され、書生にとって都合の良い「佳人」の理想像が作り上げられていったのではなからうか。それが、「才子佳人劇」における男女の倫理観と考える以外、本稿で取り上げた両劇の描写の矛盾を理解する術は見当たらない。

6. おわりに

下見隆雄氏は、「女卑」によって成り立つ「男尊」、または「女卑」によって支えられた「男尊」こそが、男女関係からみる儒教社会の実質のすがた²¹⁾と論じているが、本稿で見てきたような「才子佳人劇」における一見矛盾した男女の描写は、「儒教社会」に限らず男性側（ここでは書生）の女性に対する一方的な理想像、すなわち単なる欲望が表出したものとも考えられる。この点は、中国文学、特に通俗文芸作品における男女の描写について、「儒教」という縛りを外して分析することの必要性を感じさせるものである。むしろ、そこに儒教的価値観が全く反映されていないとは言わない。ただ、文学作品は作者の欲望の吐露であるという観点も、傍らに置いておく必要があると考える。

なお、本稿で取り上げた「瀟湘雨」劇と「鴛鴦被」劇は、それぞれの物語の導入部分である楔子において、主人公の「佳人」の父親が神を祭らなかつたり借金をしたりするという、良からぬ結果を招くような行為が描かれている。そのことが、主人公の苦難に直結するかどうかは、他作品の事例も交えて分析する必要があるが、そこに仏教的業報思想が影響している可能性も考える必要があるかもしれない。また、「鴛鴦被」劇における道姑や道観といった道教的要素については、井上泰山氏が「元雑劇の世界においては、道観の内なる人々を俗世とは無縁の存在としてとらえる視点は微塵もなく、彼らもまた煩惱を離れられない人間として、いやむしろ俗人以上に俗世の営みに執着し追求して止まない人間として描いていく」と論じ、「道観なる

場所は、元雑劇にあつては単なる聖地ではなく、むしろ男女の色恋と深く結びついた場所なのである」と分析している²²⁾が、才子佳人劇、あるいは宗教劇ではない元雑劇における宗教的要素に関しては、今後さらに詳細な検討が必要と思われる。

最後に、本稿では良家の娘を「佳人」とする才子佳人劇の事例のみ見てきたが、「書生の願望」をより明確にするためには、妓女を「佳人」とする才子佳人劇の描写も分析する必要がある。今後の課題としたい²³⁾。

注

- 1) 「才子佳人劇」の名称・分類・来歴等については、王永恩『明清才子佳人劇研究』（上海古籍出版社、2014年）に詳しい。なお、田仲一成氏は書生と良家の娘の恋愛劇を「文人伝奇劇——思情劇」、書生と妓女との恋愛劇を、妓楼における世話物も含め「妓院風情劇——風月劇」に分類している。田仲一成『中国演劇史』（東京大学出版会、1998年）参照。
- 2) 唐代伝奇『鴛鴦伝』の段階では主人公の二人は最終的に結ばれない（鴛鴦が家柄の差をあきらめ別人に嫁ぐ）が、諸宮調『董解元西廂記』ではすでに二人が団円するよう改編されている。『西廂記』の変遷については、黄冬柏『『西廂記』変遷史の研究』（白帝社、2010年）等を参照。
- 3) 元雑劇の分析に『元曲選』本を用いることについては、成立年代および改編の有無の観点から批判的な意見も多いが、通行本、すなわち多くの人々に読まれ受け入れられたという観点からすると、『元曲選』本を基に論ずることも学術的意義はあると考える。また、レーゼドラマ（読み物としての戯曲）に改編された『元曲選』本は演劇的要素を論ずるに相応しくないという考えもあるが、それが「戯曲」である以上、たとえレーゼドラマであっても演劇的要素がなくなることはない。赤松紀彦氏が『『元曲選』がめざしたもの』（『田中謙二博士頌寿記念中国古典戯曲論集』、汲古書院、1991年所収）で結論付けているように、『元曲選』は「読むためのテキストにしかなり得ないものであったのだが、演じられるものとしての性格を強調して元雑劇をいわば再構築したものであり、しかもそれがなかなか巧妙なものであったがために、多くの読者を獲得した」ということである。なお、元雑劇の明刊本各種の性格については、小松謙『中国古典演劇研究』（汲古書院、2001年）

- に詳しい。
- 4) 原文は、「一箇好女子也」。なお、原文の日本語訳は拙訳（以下同様）。
- 5) 原文は、「小生若負了你呵，天不蓋，地不載，日月不照臨」。なお、原文の句読点は筆者（以下同様）。
- 6) 原文は、「我伯父家那箇女子，又不是親養的，知他那裏討來的。我要他做甚麼。能可瞞昧神祇，不可坐失機會」。
- 7) 原文は、「這個是我家買到的奴婢。爲他偷了我家的銀壺臺盞，他走了，我一向尋他不着。他今日自來投到，豈不是飛蛾撲火，自討死吃的。左右，拏將下去，洗剝了與我打着者」。
- 8) 原文は、「若殺了崔通，難道好教孩兒又招一個。只是把他那婦人臉上也刺潑婦兩字，打做梅香伏侍我便了」。
- 9) 原文は、「這也說的有理。左右，將那厮拏過來。看崔文遠面上，饒免死罪。將恩人請至老夫家中，養贍到老。小姐還與崔通爲妻。那婦人也看他父親禮部面上，饒了刺字。只打做梅香，伏侍小姐」。
- 10) 原文は以下の通り。
 【醉太平】不爭你虧心的解元。又打着我薄命的婬娟。險些兒做樂昌鏡破不重圓。乾受了這場罪譴。爹爹呵，另巍巍穩掌着森羅殿。崔通呵，喜孜孜還歸去秦川縣。我翠鸞呵，生刺刺硬踰入武陵源。也都是蒼天可憐。
 【尾煞】從今後鳴琴鼓瑟開歡宴。再休題冒雨湯風苦萬千。抵多少待得鶯鶯續斷絃。把背飛鳥紐回成交頸鴛。隔牆花攀將做並蒂蓮。你若肯不負文君頭白篇。我情願舉案齊眉共百年。也非俺只記歡娛不記冤。到底是女孩兒的心腸十分樣軟。
- 11) 原文は、「今日遠鄉了君瑞，逃走了紅娘。單撇下個鶯鶯。爲家私少長無短，我則得忍氣吞聲」。
- 12) 原文は、「天生的一表非俗，匹配得你過」。
- 13) 原文は、「這等我可則依着姑姑便了」。
- 14) 原文は、「今夜約定劉員外在玉清菴赴期。我是個女孩兒，羞答答的怎生去那」。
- 15) 途中の白（せりふ）は省略。原文は以下の通り。
 【伴讀書】我斂墜了無心插。眉淡了教誰畫。則我這軟怯怯的柔腸好教我撇不下。汗浸浸濕香羅帕。我正歡娛忘了把門扎。可擦的似有人來迓。
 【笑和尚】元來是培塿畫簷前敲鐵馬。元來是赤力力草堂中風吹畫。元來是忒楞楞騰宿鳥串藤架。元來是各支支聲戛琅玕竹，元來是明晃晃月射小窗紗。早說的我戰欽欽把不住心頭怕。
 【倘秀才】他大字兒將咱鎮壓。我恰纔小膽的爭些兒說殺。哎，你個撒潑的先生也那假若是有人見，若是有人拿。登時間事發。
- 16) 原文は、「好也，你兩個官官相爲。我死也」。
- 17) 原文は、「一般的父親，一般的做官。偏他這等威勢，俺父親一些兒救我不得。我老實說，梅香便做梅香，也須是個通房。要獨佔老公，這個不許你的」。
- 18) 拙稿「中国近世通俗文学における「勧善懲悪」」（『関西大学中国文学会紀要』第31号、2010年／拙著『中国近世通俗文学研究』、汲古書院、2011年再録）。
- 19) 後藤裕也・西川芳樹・林雅清編訳『中国古典名劇選』（東方書店、2016年）87頁（「瀟湘雨」解説）。その他、前後の時代の文学作品における女性像への儒教の影響については、柳田節子『宋代庶民の女たち』（汲古書院、2003年）、合山究『明清時代の女性と文学』（汲古書院、2006年）、張軼欧『明代白話小説「三言」に見る女性観』（中国書店、2007年）、仙石知子『明清小説における女性像の研究——族譜による分析を中心に——』（汲古書院、2011年）等に詳しい。
- 20) 吉川幸次郎『元雜劇研究』（岩波書店、1948年／『吉川幸次郎全集』第14巻、筑摩書房、1968年所収）上篇「元雜劇の背景」第二章・第三章「元雜劇の作者（上）・（下）」、および注3小松謙前掲書I「元代における元雜劇」第一章「元雜劇作者考」参照。
- 21) 『孝と母性のメカニズム——中国女性史の視座——』（研文出版、1997年）285頁。
- 22) 「元雜劇の道士と道姑～その性格と役割をめぐって～」（井上泰山『中国近世戯曲小説論集』、関西大学出版部、2004年、88～89頁／『田中謙二博士頌寿記念中国古典戯曲論集』、汲古書院、1991年原載）。
- 23) なお、小松謙氏は『中国白話文学研究——演劇と小説の関わりから——』（汲古書院、2016年）の第一部「元曲について」第三章「元曲」考（二）——雜劇について——（原題「元雜劇を生んだもの——散曲との関わりを中心に」、『京都府立大学学術報告 人文』第66号、2014年原載）の中で、妓女を「佳人」とする才子佳人劇に関して、「雜劇に妓女と知識人の恋愛を主題とするものが数多くあること」には、「雜劇において妓女の役を演ずるのは本物の妓女であり、妓樓の客の多くは知識人であった」ことや、「知識人が散曲を作り、それを妓女が唱うという状況が存在した」ことなどの「実演の状況と無関係だとは考えがたい」（107頁）と分析している。

ABSTRACT

The Outlook on Ethic of the Man and Woman Seen in the Wit and Beauty Dramas of Yuan Dynasty: The Description of Yuan Drama “*Xiao-xiang Yu*” and “*Yuan-yang Bei*” for an example

Masakiyo HAYASHI

Abstract: In one of the Yuan Dramas, there is “A clever man and a beautiful woman drama” where they fall in love with each other, and after many troubles, they get married at last. It is a theme that becomes the grand finale, because both are bound together, but there is the work to describe the marriage that one or both sides did not originally expect as an ending. I will take up “*Xiao-xiang Yu*” drama and “*Yuan-yang Bei*” drama that are the characteristic works in this report, and analyze each portraiture. I will inspect an ideal type of marriage about a man and woman in the Yuan dynasty.

keywords Yuan Dramas, Wit and Beauty Dramas, “*Xiao-xiang Yu*”, “*Yuan-yang Bei*”, Ethic